

【審査論文】

『枯尾華』『倂や』歌仙分析

佐藤 勝明

An analysis of Kareobana (Part2)

SATO Katsuki

要旨

元禄期の連句作品を分析する作業の一環として、其角編『枯尾華』(元禄七年刊)に収められる、杉風系俳人による芭蕉追悼の「倂や」歌仙を取り上げる。そして、その分析により、芭蕉流の手法(とくに前句と離れた付け方)が共有されていることは認められる一方、二句を離そうとする意識が悪く作用して、恣意的な語句・題材の選定になりがちな一面もあることを指摘する。

キーワード… 俳諧・元禄期・連句・深川連衆・枯尾華

注釈のない元禄期の連句作品を対象に、各付合を分析して傾向を探る試みの第四弾として、本稿では、其角編『枯尾華』(元禄七年刊)の「倂や」歌仙を取り上げる。同書は元禄七年十月十二日に没した芭蕉の追善集であり、蕉門諸家による追善の連句や発句をいち早く収めたことで知られる。本誌前集では、同書所収の嵐雪系俳人十九人による「十月を」歌仙を分析し、基本的には芭蕉流付合手法の共有が確認できる一方、二句の言語外空間に一場面を浮かび上がらせようとする志向は希薄で、ここに芭蕉晩年の俳諧との違いがあるという結論に至った。では、「十月を」歌仙と同日(十月二十二日)

に杉風ら深川連衆を中心とする三十六人で巻かれた「倂や」歌仙の場合はどうなのか、ということが、本歌仙に対する主たる関心事となる。各付合の分析では、①作者は前句をどう理解し、とくにどの点に着目したか〔見込〕、②その見込に基づき、この句ではどのような場面・情景・人物像などを描こうと考えたか〔趣向〕、③その趣向に従い、どのような素材・表現を選んで一句にまとめたか〔句作〕、という三段階による分析方法を用いる。底本には天理図書館綿屋文庫俳書集成22『芭蕉追善集』(八木書店 平成9年刊)所収の影印(綿屋文庫蔵本による)を用い、『宝井其角全集』(勉誠社 平成

6年刊)等に所収の翻刻本文を参照した。句の掲出にあたっては、原典に忠実であることを第一義としつつ、字体は通行のものに統一し、濁点と振り仮名(前書では読点等も)を私に付した。また、古典文学作品の引用では、基本的に日本古典文学大系(岩波書店)の本文を使用した。

十月廿二日興行

故人も多く旅にはつと、逆旅・過客のことはりをおもひよせて

おもひかけ
俳やなにはを霜のふみおさめ

桃隣

発句 冬十月(霜) 名所・降物

〔句意〕面影が浮かぶことよ、難波を霜の踏み納めとして逝去された師の。

〔備考〕前書により、芭蕉の遷化から十日後の興行と知られる。「つと」は「苞」で、食糧などを入れ旅に携行する包みをいい、ここは死出の旅に携える物をさす。「逆旅・過客のことはり」は宿屋と旅人に関する道理ということとで、『奥の細道』冒頭の「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」(周知の通り、これは李白「春夜宴桃李園序」の「夫レ天地ハ万物ノ逆旅、光陰ハ百代ノ過客」を踏まえる)を念頭に、あらゆる生命はしばし現世を過ごして去っていくという理をさす。「俳」は「面影」に同じく、ここは十日前に世を去った師の面影。「なには」は「難波」で、芭蕉が大坂御堂前で生を終えたことを踏まえる。「霜」は十月の景物(『はなひ草』等の諸書にこの月の扱い)として選んだもので、当地の霜がこの世の霜の踏み納めになったと述べ、哀悼の意を示している。

淡くかげろふ冬の日の影

子珊

脇 三冬(冬の日)

〔句意〕冬の日光が淡くほのめく中に、亡き人の幻影が浮かぶようだ。

〔付合〕①前句の「俳」が大坂で死去した芭蕉のそれであることを受け、②前句の作者と気脈を合わせ、ともに師の姿を幻視している様子を表そうと考え、③淡くちらめく冬の日光にその人の姿が浮かんでくるとした。

〔備考〕この句の「かげろふ」は名詞「陽炎」の動詞化したもので、光がほのめくことや、姿・幻などがちらつくことを表す。「日の影」は日の光のことであると同時に、前句の「俳」を受け、「影」が眼前にはいない人の姿をも含意する。なお、「冬の日」という語の選択は、蕉風濫觴の書とされる荷兮編『冬の日』(貞享元年奥)を念頭に置いたものでもあろう。

一面に起ふす小松風やみて

杉風

第三 雑 植物木

〔句意〕あたり一帯で起き臥していた小松も、風がやみ静まっている。

〔付合〕①前句を冬の穏やかな日射しを詠んだものと見定め、②その淡い光を受けている野外の静かな景観を描こうと考え、③一面の小松も風がやんで起き臥しをやめているとした。

〔備考〕「一面」はある場所の全体。底本をはじめ初版初刷系の諸本では「二」のあるべき箇所が空白になっており、誤刻か摺刷時のミスと考えられる。ここでは再刷系の本文により「一」を補った。「起ふす」は起きたり臥したりすること、ここは小さな松が風に揺らいでいたということ。「小松」は生命力の表象でもあり、追悼を主眼とした発句・脇から転じる意識が認められる。

よこれし馬を引出す也

岱水

初才4 雑 動物獸

〔句意〕汚れた馬を外に引き出すのである。

〔付合〕①前句を天候の回復を表したものととらえ直し、②荒天には控えていたこととして、家畜を舎内から連れ出す場面を想像し、③汚れの目立つ馬を屋外に引き出すとした。

〔備考〕「よこれし」は不潔な感じになったことで、ここは外気に当たっていないことの表象なのでもあろう。前句と合わせれば、小松のある野原への放牧に際し、久々に体を洗ってやるとも解される。

名月は夕飯早く過しけり

曾良

初オ5 秋八月（名月） 月の句 天象・飲食・夜分

〔句意〕名月の晩は夕食を早めに済ませることだ。

〔付合〕①前句から作業を急いでいる様子を看取し、②月の座であることを意識しつつ、それは名月をゆっくり楽しむためであろうと解し、その気持ちを別の行為で表そうと考え、③名月には夕飯を早く食べてしまおうとした。

〔備考〕ここでの「過し」は物事を済ませること。

どこやら軽き秋の帷子

序志

初オ6 三秋（秋の帷子） 衣類

〔句意〕秋になつて着る帷子はどことなく軽やかである。

〔付合〕①前句から月見を楽しみにしている人のさまを見て取り、②その人の心はずむさまを別のことによつて表そうと考え、③秋の帷子は何となく軽々とした感じであった。

〔備考〕「帷子」は麻・木綿・絹などで作った単衣の着物で、本来の季は夏。

皂莢に枝を分たる鴟の声

太夫

初ウ1 秋八月（皂莢・鴟） 植物木・動物鳥

〔句意〕皂莢の枝を分け合うように鴟が高い声を上げている。

〔付合〕①前句を薄着のまま屋外に出たの感と見込み、②そこで見聞きしそうな景観を取り上げようと考え、③皂莢の枝を分けて鴟が鳴いているとした。

〔備考〕「皂莢」はマメ科の落葉高木のサイカチ（サイカシとも）で、山野・川辺などに自生し、庭木や街路樹にもする。その実によつて九月に分類されるものの、ここは鴟のいる木として取り上げたものゆえ、鴟の季を重視してよいだろう。「枝を分たる」は分かれて各枝に在ること。「鴟」は全長二十センチメートルほどのモズ科の鳥で、諸書に八月の扱ひ。秋にキィキィと鋭い声で鳴き、「鴟の高鳴き」と呼ばれる。

細工に入ル古桶の底

龜水

初ウ2 雑 器物

〔句意〕古くなった桶の底の手直しに入る。

〔付合〕①前句が秋の鳥を詠んでいることに着目し、②そうした鳥の声を聞くのはどういふ人かと考え、屋外で仕事をする職人を想定し、③古桶の底を手業で補修するとした。

〔備考〕「細工」は各種の職人的な手技をいい、ここは桶の補修で、「入ル」はその作業を始めることであろう（大きな桶に身を入れて作業する可能性は、次句でいかにされる）。江戸時代には製造と販売を兼ねる居職の桶屋が現れ、修理のために出張することもあるほか、町や村を回つて修理を専門とする者もいた。ここはそうした巡回の職人が野外で修理する場合であろう。

心よき今の住持を憎みたて

孤屋

初ウ3 雑 人倫・釈教

〔句意〕人のよい今の住職への憎まれ口をたたいて。

〔付合〕①前句を大桶に入つての作業と見定め、②寺によくある大きな風呂桶を想定しつつ、そろそろ新品に替えるべきところ、またも補修を頼まれて気を腐らせる場合を想定し、③気だてのよい今の住持を憎み立てるとした。

〔備考〕「心よき」は「快き」で、他人に不快感を与えることがなく、気だてのよいさま。「住持」は仏法を保ち守ることで、とくに一寺の主僧をさしている。「憎たて」はひどく憎み嫌うことながら、ここは「あの各齋坊主が」といった言を口にする程度であろう。

三里がうちは景の塩浜しほはま

子祐

初ウ4 雑 水辺

〔句意〕三里かそれ以内の塩田が景観として広がっている。

〔付合〕①前句を住持といさかいを起こした者のことと見換え、②それを土地の有力者であるとして、何かと自慢げにふるまうさまを想像し、③眺めやる三里程度の塩浜はわが所有であるとの、その人の発話で一句とした。

〔備考〕「三里」は約十二キロメートルで、「うち」はそれ以内の範囲であること。「塩浜」は「塩田」に同じく、海水を日光に干して塩を作るための砂浜。

『邦訳日葡辞書』（岩波書店）には「シオバマ」の読みがあるも、清音で発音したとおぼしい用例も少なくない。「景の塩浜」を景観のために造られた塩浜の意とすれば、ただちに想起されるのは、『伊勢物語』第八一段で知られる源融みなもとのとむらの河原院かはらのゐん（京都六条坊門の南、万里小路の東にあった邸宅）のそれであり、奥州塩釜の景を模した庭を造り、海水を運び込んで塩焼きを楽しんだと伝えられる。作者子祐にその俳を付ける意図がまったくなかったとまで、断言はできないものの、それでは前句との関係がうまく説明できない。右の故事は次の句で利用されると考え、この段階では、景としてもすばらしい塩浜の意と解しておきたい。

此寒さあられか雪のふる曇くもり

利牛

初ウ5 冬十一月（寒さ・あられ・雪） 降物

〔句意〕この寒さからして、霰か雪の降りそうな曇り空である。

〔付合〕①前句を景観のために作った塩浜であると見定め、②河原院の故事を思い寄せ、それが冬の出来事であったことも想起して、前句の景に冬の空模様を添えようと考え、③この寒さは霰か雪が降りそうな曇天であるとした。

〔備考〕この句においては、まさに前句の「景の塩浜」が景として造られた塩田と見直されており、河原院の故事（『伊勢物語』に「神無月のつごもりがた」の文言がある）を俳にしたものと言える。「寒し・寒さ」は諸書に十月ないし兼三冬の扱いながら、ここは「あられ（霰）」「雪」が諸書に十一月の扱いであることを優先する。「ふる曇」はそれらがすぐにも降ってきそうな曇天ということ。

木綿もめんの重み手にのせて見る

白之

初ウ6 雑

〔句意〕木綿の重量を手の上に置いて量ってみる。

〔付合〕①前句が寒さを強調していたことに着目し、②温かい衣服が恋しい時期であると考え、綿を入れる作業を想像し、③木綿の重さを手に載せた具合で量るとした。

〔備考〕「木綿」はアオイ科ワタ属の植物である綿わたの種子の周りに生じる白く柔らかな繊維で、広く衣料に用いられる。ここでの「見る」は補助動詞的な用法で、試行するの意に判断するの意が含まれたものと考えられる。

背戸せど伝つたと来ては常つねく長咄ながばなし

蚊足

初ウ7 雑 居所

〔句意〕裏口伝いにやって来てはいつも長話をする。

〔付合〕①前句を木綿物の質量を確かめているさまと見換え、②出入りの商人と勝手口で対応する場面を想定し、その人の親しげに口を利く様子を表そうと考え、③背戸伝いに来てはいつもながらの長話をするとした。

〔備考〕「背戸伝ヒ」は家の裏庭・裏側などを伝い行くことで、「背戸」は家の裏口をさす。「長咄」は長時間の話で、どうでもいような内容を延々と話す場合が多い。

折角とれば蝸ぢゅうかくのからむし

李里

初ウ8 秋七月（蝸） 動物虫

〔句意〕やつとこのことで手に取るとヒグラシの殻であった。

〔付合〕①前句を裏から往き来するような隣人との交流と見換え、②その会話の一端を取り上げようと考え、その人が来る途中で見つけた物を手にしている想定し、③せつかく取つたのにヒグラシの殻に過ぎなかつたとの、その人の発話によって一句とした。

〔備考〕「折角」は苦心しての意の副詞で、ここは「折角とれば」により、何か珍しそうなものがあつたので手を伸ばしてみたら、といったニュアンスを表すのであろう。「蝸」は早朝・夕方などにカナカナと高い金属音をたてて鳴くセミ科の昆虫で、『はなひ草』以下の諸書に七月とされる。

やすく〜と平泉より木曾の月

野坡

初ウ9 秋八月ないし三秋（月） 月の句 名所・天象・夜分

〔句意〕易々と昇る点では、平泉より木曾の月の方が勝る。

〔付合〕①前句から昆虫等に並々ならぬ関心をもつ人物を見て取り、②へ蝸↓蟬↓芭蕉の奥州旅行」という連想をたどる一方、本草調査のために全国を

旅する者もいると想定し、その人の実感に基づく言を一句にしようと考え、③平泉より木曾の月の方が易々と昇るとした。

〔備考〕「やすく〜」は容易に事態が進展するさまを表わし、ここは月がためらいなく現れる様子をさす。芭蕉に「やすく〜と出ていざよふ月の雲」(『笈日記』等)の句があり、これが踏まえられていよう。「平泉」は奥州藤原氏三代の栄華で名高い岩手県南部の地名で、源義経の最期の地として知られる。

「木曾」は長野県西部の地名で、朝日将軍とも呼ばれた源義仲の育つた地として知られる。義経が苦闘の末に自死した平泉と、義仲の成長の勢いを象徴する木曾を並べ、後者にはより易々とした感じがあったわけであろう。

ところで、この付合の背景には、李時珍による『本草綱目』が慶長十二年（一六〇七）に伝来して以来、本草ブームとも言うべきものが起こり、植物や生類への関心が社会全体で高まっていたということがある。そうした学者には標本のための野外調査が欠かせず、各地への旅に明け暮れる者も少なくないはずという発想が、前句とこの句をつなぐ一つの線なのである。もちろん、「平泉」や「木曾」を地名として選んだのは、芭蕉の義経や義仲への深い関心を意識しての措置に相違なく、作者野坡の脳裡では、芭蕉自身の旅する姿も確実に意識されていたはずであろう。そして、その契機となったのは、秋季・夏季の違いはあれ、野坡が前句の「蝸」から芭蕉の「閑しむや岩にしみ入いる蟬の声」を想起して、その奥州旅行に思いを馳せるということであつたに違いない。と言うのも、野坡は芭蕉自筆の草稿本『奥の細道』（いわゆる野坡本で、現存の中尾本がこれに相当するとも考えられている）を所持した人物であり、誰よりもその紀行作品に対する思い入れが強かつたはずだからである。また、「木曾の月」には、芭蕉が貞享五年（一六八八）に姨捨山の月を見るため歩いた木曾路の旅（『更科紀行』）が、関わっていてもいるはずである。

丈幅たけはばせばき布の薄綿うすわた

太洛

初ウ10 秋九月ころか（布の薄綿） 衣類

〔句意〕 丈も幅も狭い薄綿を入れた布子ぬのこである。

〔付合〕 ①前句を諸方を旅する者の感慨と見定め、②さまざまな宿を知るその人が今日の宿ではどんなことを感じるかと想像し、③丈幅の狭い薄綿入りの布子であるとの、その人の思いを一句とした。

〔備考〕 「丈幅」は丈と幅。「薄綿」は着物に綿を薄く入れることで、そのよくな着物もいう。この句の「布の薄綿」は、入れる綿を薄くした布子（木綿の綿入れ）と見るのが妥当で、宿屋で出されたものということになろう。「薄綿」を季詞とする用例は未詳ながら、ここは秋三句を続けるべきところであり、「綿入」「布子」が冬季であることに準じ、「薄綿」で秋寒の感を表したと考える。それにしても、「木綿」から三句をはさんだだけの「薄綿」は問題で、指合上の難（同字は一般的に五句以上を隔てるべきとされる）が指摘されねばなるまい。

真白ましろな陰かげは流るゝ岸の花

八桑

初ウ11 春三月（花） 花の句 水辺・植物木

〔句意〕 岸の花の真つ白な影を映して川は流れる。

〔付合〕 ①前句から乏しい暮らしに自足するさまを看取し、②それを風雅への思い入れが強い人と考え、花の座であることも考慮して、その人が花に感慨を抱くさまを想像し、③岸の花は白い影を川に映して流れ行くとした。

〔備考〕 この句の「陰」は「影」に通用させたもの（両字は語源を同じくする）で、川面に映った物の姿をさす。ちなみに、和歌でも川に映った梅・山吹などが流れると詠まれた例が散見され、発想上はこの句も軌を一にする。

俵たはらのうへに燕つばめあつまる

桃川

初ウ12 春二月（燕） 動物鳥

〔句意〕 俵の上に燕が集まっている。

〔付合〕 ①前句で花の影が流れると詠まれたことに着目し、②流れるように飛翔する春の鳥として燕を想起しつつ、敢えてその静止したさまを描こうと考え、前句の「岸」からは川沿いの米問屋などを思い寄せ、③燕が俵の上に集まるとした。

〔備考〕 「俵」は藁などで作った貯蔵・運搬用の袋で、米穀類や炭・塩・海産物などを入れるのに用い、とくに米俵をさすことが多い。ここは河口などに多い米の問屋・商店などが想定されているのであろう。「燕」はスズメ目ツバメ科の鳥の総称で、日本では春の代表的な渡り鳥として親しまれ、『はなひ草』以下の諸書に二月とされる。「水に連れて流るゝやうな燕哉 才磨」〔瓜作〕の作もあるように、この鳥の特徴は流れるような飛び方にあると言つてよく、本来は流れない花を流れるとして詠んだ前句に対し、飛翔が特徴的な鳥の飛んでいない姿をとらえたところが、この付合の趣向であろう。

そろくゝと子をあゆませて春の空

利合

名オ1 三春（春の空） 人倫・天象

〔句意〕 春の空の下、わが子をそろりそろりと歩ませている。

〔付合〕 ①前句を燕の家族が一俵上に集まっているものと見定め、②巣立ち直後の雛を思い寄せつつ、これもようやく歩くことを覚えた人間の子へと想を翻し、③春の空の下でゆっくり子を歩行させるとした。

〔備考〕 「そろくゝ」は徐々に進行していくさまや、動作が静かでゆるやかに行なわれるさまを表す副詞。「子」は、前句から燕の雛を想定して導かれた語に相違なく、巣立ちする子燕のイメージ（「春の空」がそれを表象する）

に重ねながら、よちよちと屋外を歩けるようになった人間の子を表していると考えられる。「あゆませて」の「歩む」は、「歩く」に比べてより確実な進行を表す語であるから、小さい足ながらもしつかり大地を踏みしめる幼子のさまが想像され、効果的な措辞と言つてよい。ちなみに、燕の雛の巣立ちは孵化から約三週間後で、それからも数日程度は一緒に行動することが知られており、現在でも電線上などで給餌される姿を目にすることがある。燕の子も人の子も、ゆつくりと着実に成長を果たしていくわけである。

昼にさかりて暮のこす屋根

野々

名才2 雑 恋(さかりて) 居所

〔句意〕 昼間に発情して屋根を葺き残しにする。

〔付合〕 ①前句から空と地上を交互に眺めやる視点を看取し、②それを屋根に上がって作業をする人と見て、その人が子に付き添う妻に情欲を感じるさまへと連想を進め、③昼なのにさかりがついて屋根は葺き残すとした。

〔備考〕 「さかりて」は「盛りて」で、ある物事の最も充実した時期を迎えること。「昼もさかりて」などとあれば、太陽が真上に来る正午ころを表すことになるも、「昼に」とある以上、昼であるのに性欲を昂進させての意にとらざるをえまい(昼に盛んに作業しての意にもとりうるもの、それは次の句でそう取りなされるのであろう)。蕉風連句が性の話題も排除しなかつたことは、「上をきの干葉刻もうはの空 野坡/馬に出ぬ日は内で恋する 芭蕉」(『すみだはら』「振売の」歌仙)などからも知られるところで、作者野々がこの付合を参照した可能性は大であろう。また、この句に恋情を認めないと、本歌仙は恋のない端物の一卷ということになり、その点からも「さかりて」は右のような解でなければなるまい。「葺」は板・瓦・茅などで屋根を覆うことで、ここはその作業の中断を「のこす」と表したことになる。屋

根葺きの職人ではなく、家の主が自ら屋根に上がっていると見られる。

酒道具干ならべたる笠置川

支梁

名才3 雑 器財・水辺

〔句意〕 酒の道具を笠置川のほとりに干し並べている。

〔付合〕 ①前句を盛んに作業しても時間が足りないの意と読み替え、②貴人の逗留に当たって大規模な修復を行なうさまを想像し、『太平記』で知られる後醍醐天皇の逸話をも想起しつつ、そうした場でもありそうな光景を描こうと探り、③酒の道具を並べ干す笠置川であるとした。

〔備考〕 「酒道具」は徳利・杯などの酒を飲む際に用いる道具。「笠置川」は主として京都府南部を流れて淀川に合流する木津川上流の名称で、相楽郡笠置町付近の部分をいう。同地の笠置山頂には笠置寺があり、鎌倉幕府の討伐を企てる後醍醐天皇が元弘元年(一一三三)、ここに立てこもって諸勢力に蜂起を促したことは、『太平記』の中でも著名な逸話として知られる。

風呂敷といて鉦鼓取出す

湖松

名才4 雑 楽器

〔句意〕 包んだ風呂敷を解いて中の鉦鼓を取り出す。

〔付合〕 ①前句を盛大な宴会の準備と見込み、②そうした宴席では音楽も奏されるはずと考え、演者がその用意をするさまを想像し、③風呂敷を解いて鉦鼓を取り出すとした。

〔備考〕 「風呂敷」は物を包むための正方形の絹・木綿の布で、名称は室町時代末期の銭湯の誕生に伴い入浴用品を包んだことによるものながら、その布自体は平包の名で古くから用いられるものであった。「鉦鼓」は戦の合図などに用いる敲き鉦と太鼓をいう場合と、雅楽に使う青銅製(ないし黄銅製)

の皿形の打楽器をいう場合があり、ここは後者で、合奏の準備をするところと考えられる。前者と見て、これも笠置寺に醍醐天皇が籠もった場面が念頭にあるとしては、三句がらみとなつてよくない。

鳴ぬ間人(なぐあひ)をうかゞふほとゝぎす

桐案

名才5 夏四月(ほとゝぎす) 人倫・動物鳥

〔句意〕鳴かないでいる間は人の様子を窺う時鳥である。

〔付合〕①前句の演奏が人の心を慰めるものであることに着目し、②同じく人が心待ちにするものとして時鳥を思い寄せ、時鳥はどんな心持ちなのかと想像して、③鳴かずにいる間の時鳥は人の喜ぶ頃合いを窺っているとした。

〔備考〕「間」は語呂の上からもアイと読む語とおぼしく、ある定まった時刻や時間帯をさす。「うかゞふ」は様子などをひそかに探ること。和歌などで時鳥を対象とする際の本意は、夜も寝ないで待ちかね、ようやく聞きえた一声に安堵と感激を覚えるといったもの。この句はそれを時鳥の側からとらえ直し、人が喜ぶ絶妙のタイミングを計っているとうがったわけである。「ほとゝぎす」はホトトギス科の鳥で、諸書に四月の扱ひ。

家のふるきを小利口(こりこう)に住ム

嵐戎

名才6 雑 居所

〔句意〕家の古いところをうまく取り込み、上手に住んでいる。

〔付合〕①前句から時鳥を友とするような山中の生活を感じ取り、②自然の中の暮らしを好む人ゆえ、住居に関する不満もなく自然体で過ごしていると考え、③家の古さをかえって洒落た感じに使い住んでいるとした。

〔備考〕「小利口」は小才があつて抜け目がないというニュアンスで多く使われる語ながら、ここは『日本国語大辞典』(小学館)で「一番目に上がる」ちよつ

としゃれているさま。小意気なさま」というのに近く、古い家をむしろよい感じに住みなしているわけである。古民家を活用した現代の商店や飲食店などにも、これに通じるものがあると言えよう。

丁寧(ていねい)に又挑灯(てんとう)で送らるゝ

石菊

名才7 雑 器財・夜分

〔句意〕丁寧なことにまたも提灯を持った先導役に送ってもらう。

〔付合〕①前句の「小利口」を如才がないの意と見定め、②その一端を具体的に示そうとして、来客があつた際の対応を考え、③丁寧にもまた提灯持ちに送られると、客の側の感想をもって一句とした。

〔備考〕「丁寧」は細かいところまで注意がゆき届いていること、また、手厚く親切なこと。「挑灯」は「提灯」に同じく、蠟燭を灯すための灯火具で、この場合は携帯用のもの。夜道や葬列などでこれを持って先導する役を「提灯持ち」といい、ここは訪ねた先方が気を利かせ、帰る際にその役の者を付けてくれたのである。

風なき雪の柳地(やなぎ)につく

ちり

名才8 冬十一月(雪) 降物・植物木

〔句意〕風もなく降る雪が積もり、柳の枝先が地面に着いている。

〔付合〕①前句を暗くて足元が悪いための措置と見込み、②雪道を想起しつつ、その帰途で目にする景を描こうと考え、③風がなく降り積もる雪の重みで柳が地に着くとした。

〔備考〕「風なき雪」は風を伴わずに降る雪であるから、吹き飛ばされることなく柳にも積もり、枝がある一定の重さになったわけである。

樋の口に苦鮒ばかりかたまりて

嵐竹

名オ9 雑 水辺・動物魚

〔句意〕水路の樋口のあたりにタナゴばかりが集まって。

〔付合〕①前句が雪の柳を詠んだことに着目し、②柳を水辺のものと判断して、その水にはどんなものがあるかと探り、③水路の樋口付近に苦鮒ばかりが密集しているとした。

〔備考〕「樋の口」は「樋口」に同じく、水路などの水位を調節するため、必要に応じて開閉するための戸口。「苦鮒」はコイ目コイ科の淡水魚で、鮒に似たタナゴ類の異称。

白に手杵のせはしなき音

此筋

名オ10 雑 器財

〔句意〕手杵で臼を搗く音がせわしなく聞こえる。

〔付合〕①前句を用水の口を閉じ切っているものと見込み、②それは田に水を引き入れる必要のない収穫期ゆえと考え、そのころの農家での作業を想像し、③白に手杵を使うせわしなき音がするとした。

〔備考〕「臼」は穀物などを入れ杵で搗くための道具。「手杵」は中央のくびれた部分を手で握って搗くように作られた杵。「白」も「杵」も詞としては雑ながら、これらが脱穀や精米・製粉等を示唆すると見れば、それとなく秋の感を漂わせていることになる。

あかまへでいふほど奢る月の宿

素龍

名オ11 秋八月ないし三秋(月の宿) 月の句 衣類・天象・居所・夜分

〔句意〕月見の宿で、赤前垂の女がねだるのに応じて贅を尽くしている。

〔付合〕①前句を食事の支度に忙しいさまと見換え、②月の座であることも

考慮しつつ、それを月見の宴を催す宿屋などとして、豪気な客の様子を描こうと考え、③女が赤前垂の格好で何か言えば、それに応じて客が金銭を使う月見の宿であるとした。

〔備考〕「あかまへ」は「赤前垂」を略した「赤前」で、赤い色の前垂れをさし、これを付けて接客した宿屋・料理屋・茶屋などの女性をいう。「いふほど」は言っただけすべての意。「奢る」は必要以上にぜいたくをすること、ここは女の求めるまま酒・肴や祝儀などに金をはすむわけである。「月の宿」は月光の射し込む家をいい、ここは月見の宴席を開いている宿をさす。

行脚がへりに更る秋風

千川

名オ12 三秋(秋風) 旅体

〔句意〕行脚から帰るころ、秋も更けて風がしきりに吹いている。

〔付合〕①前句を贅沢三昧の富者と見定め、②これとは対照的な人物として、仏道一筋に励む行脚僧を想定しつつ、その帰途へと連想を進め、③行脚からの戻り道で風に更けゆく秋を感じるとした。

〔備考〕「行脚がへり」は諸国遍歴の旅から帰ること。前句とは対照的な人物を出した、「向付」の典型的な例と言える。「更る」は季節が深まること。「秋風」が『せわ焼草』等で七月に分類されるのは、秋の始まりを告げる風を重視しての措置ながら、ここは「更る」とあるので、秋全般の風をさす「秋風」(兼三秋とするものも多い)と見て問題ない。それにしても、四句前に「風」の語があり、式目上は難点となる。

よはくと葉ばかり多き菊の露

楚舟

名ウ1 秋九月(菊・露) 植物草・降物

〔句意〕弱々として葉ばかり多い菊に露が降りている。

〔付合〕①前句を長旅からの帰途と見定め、②疲れた旅人が目にするものとして、延命の薬とされる菊水を想定しつつ、疲労のイメージを菊にも投影させて、③弱そうで葉ばかりが多い菊の露であるとした。

〔備考〕「よはく」は「弱々」で、いかにも弱そうに見えること。「葉ばかり多き」は葉ばかり目立って花が少ないことを含意する。「菊の露」は菊の葉などに置いた露のことで、長寿をもたらす菊水の話（謡曲「枕蓆」等）がただちに想起されるころながら、「よはく」とした菊であれば、その効果もあまり期待できそうにない。

流れに添そそて雨あがる也

名ウ2 雑 水辺・降物

角蕉

〔句意〕流れに沿って雨が上がっていくことである。

〔付合〕①前句が菊の露を詠んだことに目を留め、②菊水の話によって川の流れを思い寄せつつ、「露」を雨上がりものと考え、③流れに従って雨が上がっていくとした。

〔備考〕「添そそて」は何かがあるところにまた新しく付け加わることながら、ここは「沿そて」に同じく（両字は通用）、流れや道などに従って行く意とおぼしい。よって、「流れに添そそて雨あがる」は、上流から下流へと徐々に雨が上あがっていくことになる。「菊水」はもともと中国河南省内郷県にある白河の支流名であり、この川の崖上にある菊の露が滴り落ち、これを飲んだ者は長生きしたと伝えられるもの。その意味で、前句の「菊の露」から「流れ」への連想は常識的なもの（『類船集』に「菊↓山川の流」「菊水↑谷」に過ぎ、「露」も雨上がりの葉に残った水滴を表すことになり、ともども創意には乏しいと言える。

居間いまながら六畳敷じよに炉ろを構かまへ

杏村

名ウ3 冬十月（炉） 居所

〔句意〕居間ではありながら六畳敷の部屋に炉をしつらえて。

〔付合〕①前句が天気あの回復を扱ったことに目を付け、②そのことに気をよくして楽しみ事を始めようとする人物を想像して、茶事を思いつき、③居間ながらも六畳の部屋に炉を構えられた。

〔備考〕「居間」は家の中で主となる人物やその家族が普段いる部屋。「六畳敷」は畳六枚を敷いた部屋。「炉」は床を方形に切つて火を燃やすところで、『増山井』等に十月の扱あい。採暖や煮炊きのためのいわゆる囲炉裏のほか、茶席で湯を沸かすためのものもい、ここは畳の一部を切り外して茶の湯の炉を構える場合と見られる。茶室を別に設けるまではせず、居間に炉を切つて茶を楽しもうという人物ながら、前句からこれが導かれる理由は判然としない。あるいは、芭蕉庵（杉風の採茶庵における芭蕉と深川連衆の交流という可能性もある）が想定されているのであろうか。

髭ひげに白髪しろがのほのかなる年

川鷗

名ウ4 雑 述懐

〔句意〕髭に白い毛がわずかにまじる年齢となった。

〔付合〕①前句を居間で炉を切り茶の湯を楽しむさまと見定め、②知足の境にある隠居の身を想定しつつ、その人の容姿を思い描き、③髭に白毛がほ見える年齢好であるとした。

〔備考〕「ほのかなる」はわずかに見えるさま。老年期に入った感慨を詠んでいるので、式目上は述懐の句ということになる。これも、芭蕉その人を念頭に置いての句作と推測されよう。

見開ケばをのづからなる花微笑^{みせう}

濁子

名ウ5 春三月(花) 花の句 植物木

〔句意〕目を開いて見れば自ずからに花も微笑を返す。

〔付合〕①前句が老境を迎えた人物である点に着目し、②芭蕉追善の意を込めることや花の定座であることも念頭に、その人との思い出から「拈華微笑」の語を思い寄せつつ、老境の人が花に向かう様子を思い描き、③目を開き見れば自ずと花も微笑するとした。

〔備考〕「見開ケ」は目を大きく開いて見つめること。「花微笑」は花が咲くことをいう「花笑^{はなわら}」に準じた造語とおぼしく、花が笑みを浮かべたようにほんのり咲いていることなのであろう。「微笑」はにっこり笑うことで、ここは「拈華微笑」の故事を踏まえたものと察せられる。靈鷲山での説法に梵王が金波羅華を献じた際、釈迦が一言も言わずにその花をひねったところ、弟子の迦葉だけがにっこり笑ったというもので、それを見た釈迦は仏法のすべてを迦葉に授けたと語ったとされる。以心伝心の妙境をいう成語としても知られており、ここは花との間にも心を通わせる人物を浮かび上がらせつつ、芭蕉翁こそはまさにそうした傑人で、翁と自分たちも以心伝心の仲であったと言いたいのであろう。

香をむすんで朝がすみたつ

滄波

挙句 三春(朝がすみ) 聳物

〔句意〕香をくゆらせていると朝の霞もたなびき出す。

〔付合〕①前句を花から安らぎを得ている人と見て、句に込められた芭蕉追善の意も受けとめ、②花を飾るなど朝に行なういくつかの日課を想像し、③香を焚くと朝の霞も立つとした。

〔備考〕「香」には音読みを指示する右傍線があるので、コウ(歴史的仮名

遣いではカウ)と発音し、薫物^{たきもの}としてのお香をさすと知られる。「焚く」「供える」ではなく「むすんで」とした理由は不明ながら、ここは仏前に供える香を想定し、これで故人と自分を結ぶという発想があると考えておきたい。少なくとも、「香」の語に翁追悼の意を込めたことは、間違いないであろう。

以上の分析に基づき、最後に、付合のあり方や一巻全体の様相について、考えるところを記しておく。

嵐雪らの「十月を」歌仙と同様、この歌仙も十日前に没した芭蕉を追悼する興行であることは、前書のほか、発句が芭蕉逝去の地である「なには」を取り上げてその「俳」を偲び、脇でもその「影」を幻視しようとした点に、よく顕現している。また、名ウ5の「花微笑」と挙句の「香」も、芭蕉追悼の思いを最後に改めて示そうとしたもので、それは名ウ3・4あたりから準備されていたと考えられる。ただし、「十月を」歌仙では随所に芭蕉語彙ともいうべきものの使用が見られたのに対し、この巻にそうした傾向を認めることはできず、ほとんど唯一の例外が「折角とれば蝸のから 李里/やすく」と平泉より木曾の月 野坡(初ウ8・9)の野坡句である。前句に「蝸」が出たのを幸いと、やや強引に旅路の芭蕉を思い寄せたのであり、付合として必然性に欠けるところがあるのは、そのためであるに違いない。同じことは、たとえば「丈幅せばき布の薄綿 太洛/真白な陰は流るゝ岸の花 八桑(初ウ10・11)などにも当てはまり、これもどうして付いているのかがわかりづらい付合と言える。察するに、前句から風雅を愛して自足する人物(それは芭蕉を想起させる)を思い寄せ、その人に似合った風景を描いたものらしい。つまり、この興行では、芭蕉語彙の利用ではなく、時に前句から芭蕉的人物の匂いを看取し、それを頼りに付けることで、ひそかに追善の意を示したようなのである。「流れに添て雨あがる也 角蕉/居間ながら六畳敷に

炉を構へ 杏村／髭に白髪のはのかなる年 川鷗〔名ウ2・4〕なども含め、そのような場合は往々にして、二句が付合として（すなわち、追善の含意からは切り離して）どう成り立っているかの理解に苦労することになる。逆の言い方をすれば、『芭蕉翁の面影』を背後に据えることで付合は担保されるという一種の甘えが、この作者たちにはあつたことになろう。

右に述べてきたことは、実は全体的な傾向にも通じてのことであつて、用語や題材の選定が恣意的と感じられることは、一卷を通して少なくない。一例を挙げると、「背戸伝と来ては常く／長咄 蚊足／折角とれば蝸のから 李里」（初ウ7・8）の場合、付句が前句にいう「長咄」の一内容であろうというところまでは、容易に推察できる。ところが、どうして「蝸のから」が話題になるのかと考えても、前句にその手がかりはない。また、蚊足の前句にしても、なぜこれが「木綿の重み手にのせて見る 白之」（初ウ6）に付くのかと考えると、明快な解答には到達しがたいことになる。本誌61・62集で分析した無倫編『紙文夾』（元禄十年刊）の二歌仙でもしばしば見られたことであり、これらは要するに、前句の見込から趣向を立て、句作に工夫を重ねた結果としての一句ではなく、作者自身の体験・見聞などに基づく思いつきの作であるからにはほかならない。それとは異なるものながら、「細工に入ル古桶の底 亀水／心よき今の住持を憎みたて 孤屋」（初ウ2・3）なども、一見してつながりは認められず、二句間の距離が大きく離れた付合（それは、後述するように、芭蕉の疎句化志向の反映であろう）と言える。おそらく、「細工に入ル」を実際に桶に入つての手仕事ととらえ直し、寺の風呂桶（健康・衛生のため信者らに入浴を施す伝統がある）を想起した上で、その寺の「住持」へと想を翻したわけであつて、〈寺の浴室〉という補助線を引かない限り、この付けを理解することは難しい。前句からよくこの付句が導かれたと感心する一方で、一つ間違えればひとりよがりの付合になりかねないとの危惧感

も抱くところであり、実際、この歌仙は（また、「十月を」歌仙や『紙文夾』の二歌仙なども）そうした事例に事欠かないのであつた。

誤解のないように説明を加えると、だからといって、「俳や」歌仙が芭蕉提唱の付け方から離反しているということにはならない。詞の対応に頼った親句からの脱却は、この連衆にとつても常識的なことであるらしく、ごく一部の残存（たとえば「よはく／と葉ばかり多き菊の露 楚舟／流れに添て雨あがる也 角蕉」〈名ウ1・2〉の付けなど）を除いて、詞付的な要素は見られない。むしろ、二句を離すことに注力したと見られる付合が多く、「前句は是いかなる場、いかなる人と、其業・其位を能見定め、前句をつきはなしてつくべし」（『去来抄』「修行」という芭蕉流の付合手法は、広く蕉門内に普及していたのだと得心させられる。三十六人の中には芭蕉との師弟関係がさほど濃密でない者もいるのに、それでも疎句化の志向が共有されているということ（また、作品としても幅広い内容を扱って興味深く、蕉門の力量とということが思われもする）は、一つの事実として重視すべきであろう。しかしながら、この「前句をつきはなして」が一人歩きして、「前句は…能見定め」の部分が忘れられていくと、付いているのかどうかの曖昧な付合が多産されることになる。本歌仙においても、この〈誤解された疎句〉とも言うべき付け方がしばしば見られたことを、やはり一つの事実として確認しておきたい。

佐藤 勝明（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 教授）

（令和四年十一月十五日受理）